



價格生活の理論：大正十二年五月十五日神戸高等商業學校開校二十周年記念講演會に於ける講演

坂西，由藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 35(2):167-194

(Issue Date)

1923-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053577>



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第三十五卷

第二號

(大正十二年
八月一日發行)

論 說

價格生活の理論

〔大正十二年五月十五日神戸高等商業學校
開校二十周年記念講演會に於ける講演〕

坂 西 由 藏

序 說

本日神戸高等商業學校が其の開校二十周年を記念する爲に此の講演會を開けるに際し、私が本校に於て與へられて居る研究題目に關する若干考察の結果を發表する機會を得たことは私の甚だ光榮とする所である。

私の講演の目的は現在に於ける經濟生活が如何なる根本的特質を有するもの

なるかを明かにせんとするに在る。此の問題に對する私の見解を明かにする爲に、私は私の最も尊敬する友人左右田喜一郎博士の所論に觸れなければならぬ。去る大正四年九月東京商科大学の前身たる東京高等商業學校が其の創立四十周年記念講演會を開けるに際し、博士は經濟なる概念に關する通説を批評して其の心理主義に捕らるゝものなることを痛撃し、認識論的方法に依るにあらざれば明確なる概念を捉へることの不可能なる所以を詳論せられた。

『經濟哲學の諸問題』改刷初版三三七五頁

カント認識論と純理經濟學

博士が此の講演並に其の他の論著に於て主張せらるる所は我が理

論經濟學に於て漸次其地歩を進めつゝあるやうである。私は嘗て南獨の學窓に思ひ出多き日を過さし、其の文化の所産に驚歎の眼を開けるの當時、左右田君と會する毎に其の峻嚴なる理論に傾聽した。さうして經濟なる概念が貨幣概念と結び付けられざるべからずとなす博士の主張は全然私の所見と一致する所である。併しながら此の貨幣中心論は最も明確に現在の經濟生活を説明するを得るものであるが、貨幣發生以前の生活に於ける經濟の概念を捉へることが出来ない。吾人の生活の今日までに於ける發達の全過程を一貫する經濟の概念は存し得ざるものであらうか。貨幣概念が現在の生活に於ける諸種の方面の中から經濟的な

る一方面を選択する原理たり得る以前に、今日に至るまでの生活の發達の全過程を一貫する經濟の根本的特質が存して居つて、其の現在の生活に於ける發現の形式が貨幣であり、従つて此の故を以て貨幣概念が現在に於ける經濟生活の嚮導概念たり得るのではなからうか。私は先づ此の疑に對して私の意見を述べたいと思ふ。

私は此の問題に答ふるに經濟哲學の高所よりせんとするものではない。私は唯、經濟史的經驗的事實より出發して多少の考察を試みんとするに過ぎない。私の見る所を以てすれば、何が經濟的と呼ぶべきかといふことは、何が事實上、經濟的と呼ばれて居るかに對する判斷に依りて答ふるの外はない。さうして之に依りて構成せられたる概念が總べての場合を通じて矛盾なきものであるならば、其の概念は妥當なりとせられなければならぬと考へるのである。

一

今私は經濟の根本的事實を捉ふる爲めに、人類生活なる一般的概念から出發しようと思ふ。此の人類生活といふ概念は人類の活動から離れて考へることは出

來ない。勿論活動そのものが生活の全體であるのではなく、此の活動によりて惹き起さるゝ人類相互間の關係、其の爲に生ずる機關、之を基として成立する組織、其の間に維持せらるゝ秩序——此等の總べては人類生活の概念中に包含せられる。けれども活動を離れて生活は有り得ないのである。所が、人生の目的が何であらうと、各個人の抱懷する理想が何所に存することを問はず、何等かの目標に向つて吾々の活動が行はれる。さうして其の目標の異なるに従つて吾々の活動が異なりたる方向を指さし、異なりたる方面に現はれるものであるからして、人類の生活が多種多様なる方面を有することになる。此の人類生活の現はるる異なりたる方面には夫々異なりたる形式が認められ、此等各種の生活發現の形式を宗教生活、藝術生活、政治生活、法律生活、經濟生活等と呼ぶのである。此の如く吾々は常に法律生活、經濟生活等の言葉を用ふるけれども、決して人類の生活が幾多の種類に分れて居るのではなく、人類生活は統一的にして不可分なるものであつて、唯之を見る方向の異なるに従つて異なる形式が現はるるに過ぎない。此の意味に於て所謂經濟生活は人類生活の一發現形式である。經濟行爲とは人類行爲の經濟的方面である。然らば人類の生活、人類の行爲が如何なる關係に於て現はるることを經

濟的と言ふのであるか。之れが吾々の問題でなければならぬ。

人類生活の發達の全過程を通じて、人類は常に何等かの形態に於ける共同生活の團體を形成し、之に依つて生活を維持したものである。原始時代に於ける生活維持の團體は血族的大團體であつた。幼稚なる時代に於て人類は力甚だ弱く、個人として獨立を完うすることが出来なかつた。血族的大團體の内に於て個人は何等存在の意義を有せず、外部に對し共同に保護し、共同に責任を負擔した。此の共同生活の團體が生活を維持する爲には、必ず外界の自然に依頼せなければならなかつた。即ち人類生活維持の爲に、人間對自然の關係が發生した。しかも原始時代にありては、個人は團體の内に埋没せられて獨立の存在を有せず、多人數の團體的動作に依りて自足自給の生活を營んだのであるからして、唯、人の團體と自然との關係が存するのみであつたのである。さうして此の場合に自然の物質を採つて、之を生活の爲に利用する技術的行程は所謂生産と消費とである。即ち生産消費の目的物は外界の物質であつて、此の外界の物質を經濟學者は財と名づけて居る。財なる言葉を廣義に用ふる者と狹義に用ふる者とあるが、原始の生活に於ては所謂權利關係は存せず、最狹義に於ける財——物財——のみが有り得たのである。

今、經濟生活とは此の財の生産消費を内容となすものと普通に解せられるのであるが、生産と消費とは生活維持の爲めの活動の技術的方面たるのみであつて、其の經濟的方面は別に存せなければならぬ。一共同生活の團體が何等かの目的の爲に外界の物質を採つて之を利用するといふ行動は統一的にして不可分なるものであるが、それに技術的方面もあり、藝術的方面もあり、また經濟的方面もある。自然界に存する或る材料を採つて、之に加工し新なる財を作り出だすこと——生産——と、之を何等かの目的の爲に用ふること——消費——とは其技術的方面である。其の作品が美の理想によつて判斷せらるる所に藝術的方面がある。さうして私の見る所を以てすれば、其の共同生活の團體に屬する所有の増減が、即ち其の經濟的方面と考へらるべきものである。

此の自足自給の生活に對して交換經濟の特色とする所は、生活の維持が單に人間對自然の關係のみに依りて行はれるのではなく、寧ろ多く人と人との關係を通じて行はれることに在る。即ち自から直接に外界の物質を獲得する方法と共に、若しくは之に代へて、他人の獲得したる物を取得する方法——交換——が一般に行はれるやうになつた。さうして此の交換の目的物は、即ち所有の對象である。現在

に於て所有の増減變化は交換の行程を通じて行はれる。而して交換せらるるものは單に物財のみではない。所謂權利關係も、また勞働給付も、共に交換の目的物である。此等の權利關係勞働給付等の全部又は或る物が財と稱せらるべきか否かは久しく論争の問題とせられたのであるが、私はそれが如何様に決せられようとも、經濟學の理論に加ふる所甚だ少なりと思ふ。重要な點は此等の總てが物財と共に個々の生活團體の支配に屬し、即ち廣き意味に於て其の「有」(Haben)に屬し従つて交換の目的物として提供せらるるといふことである。而して此の點を明かにすることは、現在の經濟生活を理解する爲に甚だ必要であると、私は考へるのである。

所が、現在の生活に於ては前に掲げた所の物財權利關係勞働給付等が相互に直接に交換せられるのではなく、交換は常に貨幣に對して行ふことを原則とする總ての有は貨幣と交換せらるる爲に提供せられ、貨幣を以てすれば任意に他の有を支配することが出来る。さうして此の事實あるが爲に、總ての有は貨幣の量を以て評價せられ、またかく評價せらるることによりて意義あるものとなり、即ち常に若干の貨幣量を代表するものと考へられる。一生活團體が若干の土地家屋家

具什器・衣服を有すといふ代りに、吾々はその團體が若干量の貨幣額を支配すと考へる。吾々の經濟行爲——吾々の行爲の經濟的方面——は貨幣額を得ることに始まり、貨幣額を費すことに終る。かくして左右田博士の主張せらるるが如く、貨幣が現在の生活に於ける經濟なる概念の構成の中心となつたのである。しかも貨幣が此の概念構成の中心たり得る所以は、それが現在に於て所有の代表たる地位を占むるからである。前述の如く自足自給の生活に於ては個々の共同生活の團體は直接に自然界に向つて働き、生産より消費に至る總べての技術的行程を其の團體の内部に於て行ひたるに對して、交換經濟の時代に於ては個々の生活團體が他の生活團體に向ふ關係を生じ、交換行程が甚だ重要となるに至つたのであるが、其の何れの時代に於ても生産・交換・消費の行程の二或は三を通じて其の生活團體の所有の増減が行はれる。これが總ての形態に於ける經濟生活を一貫したる根本的事實であつて、此の意味に於て經濟生活は所有生活なりといふことが出来る。而して現在に於ける貨幣に集中する生活は、此の所有生活の一發現たるに外ならぬ。現在の經濟生活は貨幣的所有生活である。

以上、私は人類生活の現在に至るまでの全過程を通じて所有といふことが經濟の根本的事實なることを主張した。さうして此の主張は經濟學者の間に一般に認めらるゝ二個の概念を解剖することによりて支持せられ得ると思ふ。其の概念の一是所謂自由財であり、他は經濟單位である。

自由財とは空氣、日光、水の如く生活の必要以上に存在するが爲に何人も之に對して經濟行爲に従はないものと説明せられる。所が、自由財の範圍は時代の異なるに従つて異なるものであつて、幼稚なる時代には有り餘りて存するものは、何時にても自由に之を獲得し利用することが出来るものであるからして、特に之を自己の支配の下に置くの必要なく、従つて經濟行爲の目的物から除外せられた。即ち經濟行爲の目的物となり得るものは、特に他人を排除して自己の占有の内に置くことを必要とせらるゝものに限られたのである。然るに所有觀念の發達したる現在に於ては、其の物の自然の性質上自己の占有の内に置くことの出来ないものを除くの外、假令それが有り餘りて存すると雖も何人かの所有の目的物とならざるものはない。空氣、日光等が經濟行爲の目的物たらざるは、人間が其の占有を欲せざる爲ではなく、其の性質上自他の區別を設けることが出来ないからである。

即ち事實上占有が可能なるものは其の何たるを問はず、經濟行爲の目的物であり、占有の不可能なるが爲めに何人の有にも屬せず、従つて對價を支拂ふことなくして獲得利用し得るものゝみが自由財である。それ故に自由財なる言葉の代りに寧ろ無主物又は無償財なる言葉を用ふる方が適當である。今吾々は此の如く自由財なる言葉の意義を検することによりて經濟の根本的事實が所有に在ることを了解することが出来る。

次に、人類生活の發達の全過程を通じて人類は常に何等かの形態に於ける共同生活の團體を形成したるものなることは前に述べた所である。此の共同生活の團體は種々なる職能を有するものであるが、それが經濟的に現はれたる方面は即ち經濟單位である。此の共同生活の團體、即ち經濟單位は原始時代には血族的大團體、大家族であつて、それが時の経過に従ひ次第に分裂縮小し、現在の如き小家族の獨立を見るに至つた。此の經濟單位の漸次的縮小は經濟發達の過程に於ける一の顯著なる傾向であつた。然らば此の經濟單位は如何なる性質を有するかといふに原始時代に於ける大家族は多人數の血族者が共同に所有し住居を共にする團體、即ち共有共產の大團體であつて、之を家族共產體といふ。此の血族的

大團體の漸次的縮小はやがて共有共產的生活の行はるゝ範圍の縮小であつて、現在に於ては共有共產の原則は極めて小人數なる家族の範圍内に限局せられて居る。福田博士の説かるるが如く、現在に於ても家族は共產主義の最終の隠れ家である。經濟學研究 前編六五頁 卽ち經濟單位は畢竟所有團體である。原始時代の所有團體は直接に自然と對立し、生活維持に必要な物財の所有を増加し、之を其の團體の内部に於て利用した。而して現在に於ける所有團體は、主として他の團體と對立し、生活維持の爲めに貨幣的所有を増加し、之を其の家計の爲に充用するものである。卽ち之によりて吾々は經濟の概念が所有の概念と一致するものなることを知ることが出来る。

二

經濟生活は所有生活である。人類行爲が所有の増減に現はるる方面を經濟行爲といふ。さうして現在の生活に於ては所有の對象は同時に交換の目的物である。總ての所有の對象、交換の目的物は常に貨幣の數量を以つて評價せられ、常に若干の貨幣額を代表するものと考へられる。此の意味に於て現在の經濟生活は

貨幣的所有生活であり、貨幣的評價の生活である。

一の有が貨幣の數量を以て評價せられることを通常貨幣價值の判斷といふ。故に現在の經濟生活は貨幣價值の生活なりといふも妨げない。

然らば貨幣價值とは何を意味するか。例へば茲に一箇の時計があつて、之れを五十圓と評價すると同じ意味に於て、其の一箇の時計の貨幣價值は五十圓なりとか、或は其の時計は五十圓の價值を有すとかいふやうな言葉が用ひられる。之が即ち此の時計の價值である。かくいふときは純主觀的な價值が客觀的・數量的のものとして現はるる様に見えるけれども、實は決してさうではない。價值は一の主體が一の客體に對して認むる所の意義であつて、徹頭徹尾主觀的なものである。之に對して五十圓なる貨幣は客觀的・數量的存在を有する。即ち前者は質であつて、後者は量である。質の強度を現はすに量を以てすることは不可能である。併しながら質の強度の變化に應じて起る量の變化は之を考へることが出来る。今一箇の時計が五十圓の貨幣價值を有すといふことは判斷の主體が其の時計に對して附する意義と五十圓の貨幣、詳しく言へば一圓なる貨幣單位其の單位を十錢とするも一錢とするも差支はない)の五十倍に對して附する意義と等しいと言

ふことを云ひ現はすに外ならない。此の場合に五十圓なる貨幣の代りに一箇の指輪又は一枚の衣服を以て評價を行ふも不可でない。さうして判斷の主體が此の一箇の時計に對して附する意義と其の一箇の指輪又は一枚の衣服に對して附する意義と等しとなすならば、之に依つて時計の價值は一箇の指輪又は一枚の衣服の價值を以て云ひ現はされ得ることになる。是れ即ち交換價值の判斷である。唯、現在の貨幣經濟的生活に於ては總ての有の價值は常に共通に貨幣單位の價值を以て云ひ現はさるるといふだけのことである。貨幣價值の判斷は一財の貨幣に對する交換價值の判斷である。

茲に於て貨幣單位の價值は如何なる條件によりて定まるかといふ甚だ重要な問題が起る。私は茲に貨幣の本質と其の職能とは何であるかといふ理論經濟學の根本的重要問題に觸れんと欲するものではない。唯、現存の事情の下に於て個個の經濟主體が貨幣單位に對して行ふ價值判斷は如何なる條件によりて支配せらるるかといふことを問題とせんとするのみである。

先づ明かにせなければならぬことは、總ての所有の對象の中に於て貨幣が特異の地位を占むることである。貨幣以外の一切の有は具象的な目的のために存するに對して、貨幣の一定集積を構成する所の各單位は何れも無差別に任意の他

の有を支配し得る手段として抽象的、一般的の意義を有する。左右田博士の言葉を藉りて之れを言へば、貨幣は無限の目的に對して結合點を形成して居る所の手段として存する。前掲著書 三四九頁 故に一の主體が支配する一定貨幣額の價值は、其の内に包含せらるる單位の數量に比例するものと考へなければならぬ。併しながら

此の貨幣單位其のものの價值の判斷は其の人が處分し得べき貨幣額の多少によりて支配せられる。即ち其の處分し得べき貨幣總額の大なるに従つて其の内に含まるゝ單位の價值は減せざるを得ない。『國民經濟雜誌』第二十六卷第五號 所載拙稿「貨幣價值と限界利用說」 例へば

百圓を有する場合に一圓を尊重する度合は千圓を有する場合に一圓を尊重する度合よりも大である。同じ一圓の貨幣も前の場合には所有の百分の一に當り、後の場合には千分の一に當る。勿論數學的に百分の一が千分の一よりも大なると同じ割合に於て一圓に對する價值判斷に相異があるとは云ひ得ないのであるが一經濟主體が貨幣單位に附する意義は其の人の支配の下に在る貨幣額の増大又は縮小するに従つて小又は大となるものと云はなければならぬ。即ち高垣教授の云はるゝ「部分量對全量相對性の法則」本紙前號所載高垣教授論文末尾參照 が茲にも其の適用を見

るものといふべきである。

貨幣單位は所有單位である、所有評價の單位である。貨幣の一單位を支拂ふといふことは所有の若干分の一を他人に引渡すといふことである。一個の時計を五百圓を有する甲が五十圓の價值ありとなし、千圓を有する乙も亦同様に五十圓の價值ありとなすときは、其の時計に對し甲の認むる貨幣價值と乙の認むる貨幣價值とは外面的數量的には等しいのであるが、其の價值判斷の内容は甚だ異なるものである。即ち此の場合に於ては、同じ五十圓の貨幣を甲は乙よりも高く價值附けるであらう如くに、同じ一個の時計を甲は乙よりも高く價值附けて居るのであらう。併しながら純主觀的なる價值判斷が其の内容は主體の異なるに従つて異なるにせよ、外面的には比例的なる純數量的關係に導かることは現在の經濟生活の一特色であつて、意義の甚だ大なるものと云はなければならぬ。

所が今日の經濟生活に於て行はるゝ所の價值判斷は決して純然たる個人的判斷たるものではない。各自の主觀的判斷は常に社會的綜合判斷によりて影響を受けざるを得ないものである。他の言葉を以て云へば、各個人の價值判斷は常に社會多數者の價值判斷に追從するものである。さうして之と同時に各個人の價

値判斷がやがて、社會的綜合的價值判斷の形成に寄與するものである。固より價值判斷が純主觀的のものたる以上、一の財に對する社會的價值判斷を直接に測定することを得るものではない。併しながら各個人の主觀的なる價值判斷が前述したる意味に於て貨幣價值によりて云ひ現はさるゝ様に社會的價值判斷は間接に一般的價格に反映するものと看做すことが出来る。何となれば一種類の財に對して社會多數者の認むる價值高ければ事實上支拂はるゝ所の價格は一般に昇り之に反して社會多數者が之に認むる價值低くければ事實上支拂はるゝ所の價格は一般に降らざるを得ないからである。かくして一定の時に於て一種類の財に對し社會の多數者が事實上支拂ひたる價格の一般基準は各個人の心理に反映し其の主觀的なる價值判斷の材料となるものである。それであるからして例へば或る人が或る一個の時計に五十圓の貨幣價值を認むるときには既に其の前に此の種の時計若しくは他の種類の時計に對する社會的評價が成立して居るのが常である。即ち社會の多くの人が此の種の時計に對し五十圓を、或は之よりも優れる時計に五十五圓・六十圓・七十圓を、之よりも劣れる時計に四十圓・三十五圓・三十圓を支拂ひ、又は支拂ふであらうことを知り、若しくはかく推定したることの結果

として、自ら之に五十圓の貨幣價值を認める。又かくして此の時計に五十圓の貨幣價值を認めたる人が之を五十圓若しくは夫れ以下の價格(例へば四十九圓)を以て賣手より提供せられたるにより賣買を行ひ、茲に一定の價格が成立するとき、其支拂はれたる價格(四十九圓)はやがて其の時計に對する社會的評價の結果と看做さるべき一般價格基準の一成素たるに至るものである。

論じて茲に至る時、吾々は更に費用、價值の概念に逢着する。費用價值とは、一財を獲得する爲に必要な貨幣量(費用)の判斷である。即ち費用價值は貨幣價值の一種である。或る人が或る一個の時計に對し其の特定の事情の下に於ける具體的欲望と其の處分し得べき貨幣額とに照應して百圓の貨幣價值を認むることがあり得るとする。しかも若し此の人にして其の時計が五拾圓の費用を以て獲得せられ得べきことを知り、若しくはかく推定するときは、此の人の此の時計に認むる貨幣價值は其の特定の事情の下に於ける最頂點(百圓)に達することは寧ろ稀であつて、通常五十圓なる費用價值のみが其の認識に上るのである。故に現在の經濟生活に於ける價值判斷は、純然たる個人的欲望と直接に對應するものと見るべからざる費用價值の判斷に到達せざれば已まず、其の決定的要因は所有の多少に

照應して判斷せらるる貨幣單位の價值であると云はなければならぬ。

以上の研究に於て私は消費經濟の立場よりする價值判斷に就いて考へた。然らば營利經濟の立場よりする價值判斷は如何にして行はるるかといふに此の場合に於ても其の價值判斷は結局に於て最後の消費者の欲望に對照して行はるる價值に根據を置くものたることは勿論である。併しながら一の財に對して企業者の認むる價值が直接に最後の消費者の個人的欲望に對照して判斷せらるるものでないことも亦言を俟たざる所である。商人が一の商品を購ふは其の人自身の消費に供せんが爲ではなくして利益を得て轉賣せんが爲である。従つて其の商品に對して認むる價值の大小は之に依り營利の目的を達し得るの見込如何によりて支配せられる。營利の見込の大小は消費者多數の其の財に認むる貨幣價值によりて定まる。即ち營利經濟の立場よりすれば一財に對する價值判斷は其の財の消費者の多數の評價を如何に判斷するかによりて決せらるるものと云はねばならぬ。所が財が原始生産の階段より最後の消費者の手に達する迄には通常多數の生産及び商業の階段を経過するものである。後段
參照而して其の中の何れかの階段に立つ企業者の行ふ價值判斷は其の次の階段に立つ企業者の多數の評

價を如何に判斷するかによりて定まり、最後の消費者の評價は唯結局に於て決定的要因となるのみである。其の何れの場合に於ても、次の階段に立つ者の評價を判斷する主たる材料はそれまでに事實上成立したる價格である。

されば、消費經濟の立場より見るも、また營利經濟の立場より見るも、貨幣價值の判斷は純主觀的なものであるが、既にそれまでに事實上成立したる客觀的な價格の影響を受けるものなることが明かである。貨幣價值の生活は、價格を前提することなくして考へることは出来ない。現在の經濟生活に於て價值の世界は價格の世界と境を接するものである。

三

貨幣價值の生活を支配するものは價格である。價格は個人の價值判斷に影響し、個人の價值判斷は價格を決するものである。故に或る時點に於ける價格基準は過去に於て成立したる價格基準に胚胎し、現在の價格基準は更に將來の價格基準を喚び起す。價格は一の歴史的事實である。『價格は如何にして決定せらるゝや』の問題は結局『價格は如何にして變動するや』の問題に外ならないので

ある。價格論の中心問題は價格變動、要因であるといふことは私と研究を共にしつつある谷田義一氏が久しく主張するところである。

現在に於て生産は營利の目的を達する手段として行はるる技術的行程である。生産は直接に消費の爲に行はるるのではなく、市場に提供して出來得る限り多くの價格を捉へ得べき商品を作ることを目的とするものである。即ち現在に於ては生産は實際の消費と甚だしく隔絶するものであつて、商品生産又は市場生産と呼ぶるは此の故を以てである。此の商品生産の質と量とは生産物が市場に於て如何なる價格を捉へ得るかの見込によりて定められる。一定の商品を生産する爲めに用ひらるべき個々の生産要件に對して支拂はなければならぬ價格が小なれば小なる程、また生産の結果が市場に於て捉へ得る價格が大なれば大なる程、生産の局に當る所の企業者の収益は大となる。さうして其の利益の見込の小によりて如何なる商品を如何なる分量に於て生産すべきか、また其の生産の爲に如何なる技術を採用すべきかの問題が決定せられる。かくして個々の商品に對し市場に於て定まる所の價格が一國民經濟内に於ける生産の方向を決するものである。商品の價格は所得—所得も亦價格である—の大さに影響し、個々の經濟單位が處分し得る貨幣額を決する。さうして箇々の商品に對して支拂はれざ

るべからざる價格はやがて消費の内容を定めるものである。價格は國民經濟の全組織に於ける支配者である。現在の經濟生活は價格の生活である。

今、私は此の價格生活の構造を敘述して、現在に於ける經濟生活の特質を明かにしたいと思ふ。さうして之が爲めには一國民經濟を構成する所の經濟單位は收得の爲の經濟收入(經濟)と充用の爲の經濟支出(經濟)即ち所謂營利經濟と消費經濟との二種類に分れて居るといふこと、此等の獨立なる經濟が分業と交換の關係によりて結び付けらるゝものであるといふこと、の二つの解り切つた事實を了解して置くことが必要である。

經濟生活の理論を説くに當つて、生産交換分配消費の四部門を分つことが多く行はれる。かゝる説明の方法によれば經濟生活の出發點は生産であつて、其の到達點は消費である——即ち財が先づ生産せられ、交換分配を経て、而して後初めて消費の行程に入るものである——と云ふ様に見える。併しながら現在の價格生活は決してかゝる機械的の構造を有するものではない。生産交換分配消費は四個の分立したる行程ではなく、生産せられつゝある間に交換せられ分配せられ、また同時に消費せられるのである。

一國民經濟内に存する總ての經濟が一定時期の間、例へば一年間に各種の商品を購賣する爲に其の價格として支出する所の貨幣額の總計は其の國民經濟内に於ける一年間の消費の總量である。さうして此等總ての消費經濟が支拂ふ所の各種商品の價格は生産の局に當る所の營利經濟の收穫を形成するものであつて、之が即ち其の國民經濟内に於ける一年間の生産の總量である。所が、各種の商品が營利經濟の世界を離れて消費經濟の世界に移るまでには、其の原料の獲得より完製品として作り上げらるゝに至るまでに通過せられなければならない生産の行程は若干の階段に分割せられ、各階段に於ける生産は夫々獨立なる企業者によりて行はれる。即ち此の「生産の分割」——福田博士の用語に従へば「生産分業」の最下の階段をなすものは、農業、牧畜業、漁業、鑛山採掘業等の原始生産の階段であつて、其の獲得する所の原料は第二の階段に於て半製品となり、順々に高次の階段に進み、最高の生産階段に於て完成品となるのである。また此等の生産階段の間に幾多の商業階段が介在する。原料品を輸入して之を半製品の生産に従事する者に轉賣する商人もあり、半製品を仕入れて之を完製品の生産に従事する者に轉賣する商人もある。また完製品を大口に取扱ふ卸賣業者もあり、之を小口に消費者

に販賣する小賣業者もある。さうして此等の多數の階段を連絡する關係は總て價格受授の關係——交換行程——である。今、消費の目的物は小賣業者の手より消費者の手に移ることもあり、或は卸賣業者、または生産業者の手よりすることもある。假に第一の場合に就いて之を見るに、消費經濟より營利經濟へ支拂はるゝ價格は、先づ小賣業の總收穫をなすものであつて、此の内から其の仕入價格を卸賣業者に支拂ひ、其の殘餘の内から貸銀、借入資本の賃子、利子、地代等を控除し、尙殘存する所は其の小賣業者の利潤となるものである。次に小賣業者が卸賣業者に支拂ひたる價格は其の卸賣業者の總收穫をなし、其の内より完製品を生産者に支拂はるゝ仕入價格を控除し、其の殘餘は前と同様に各種の所得に分たれる。更に完製品の生産に従事する企業者は其の得る所の總收穫の内から、其の生産材料の購買價格を半製品生産者に支拂ひ、其の殘餘はまた各種所得に分たれる。かくして順次に生産及び商業の階段を溯つて原始生産の階段に達するときは、其の局に當る企業の總收穫の内より材料の價格として支拂ひを受くる前階段がないのであるからして、其の總收穫の全體は各種の所得に分たるのである。それ故に消費經濟の世界から營利經濟の世界へ移されたる價格の一年間の總計——消費の總量——

は先づ生産及び商業の最高階段に立つ企業者の總收穫——生産の總量——となり、それより順次に前の總ての階段を通過する間に、悉く各種の所得に分割せられる。即ち最初に消費經濟の世界から營利經濟の世界へ移されたる價格の總計は總ての所得の源泉であつて、さうして此の各種の所得は直ちに消費の目的物を購買する爲に消費經濟より營利經濟へ支拂はるのである。それであるからして一國民經濟内に於ける消費の總量は生産の總量に等しく、また所得の總量に等しい。
レキシス一鈔經濟學
一三七頁以下參照 さうして茲に述べたる過程の全體は即ち價格受授によりて行はれるのである。

以上の敘述に於て、私は所得分配の過程を平面的・計算的に配列した。即ち個々の階段に立つ企業者は其の商品を市場に提供して得たる所の價格の内から材料の價格を支拂ひ、また貸銀・利子・地代等を控除し其の殘餘を自己の所得となす様に説明した。併しながらそれは單に總勘定元帳に於ける見方に過ぎないのであつて、實際上企業者は其の收穫を得たる後に貸銀及び貸子を支拂ふのではない。企業者の支拂ふべき貸銀は勞働の給付を受ける時に既に契約によりて確定し、之に依りて生産せられたる商品が市場に提供せられ、何等かの價格を捉へ得る前に支

拂はれる。賃銀は労働といふ商品の價格である。企業者が此の労働といふ商品を投機的に購買すること、生産の材料を購買すると異なる所はない。借入資本に對する賃子に就いてもまたさうである。其の賃子(利子地代等)は資本使用に對する價格であつて企業者は此の資本使用を、また生産の材料と同様に投機的に購買する。企業者の立場より見れば、賃銀も利子も地代も、材料に對して支拂はれたる價格と同様に生産の費目を形成するものであつて、此等の總ての費用は其の生産物が市場に於て獲得する價格によりて回收せられなければならぬ。さうして其の得る所の價格が支拂ふ所の價格より大なれば利潤を殘存し、反對に得る所の價格を以て支拂ふ所の價格を償ふを得ざる場合には損失を生ずるのである。

價格は一定不動のものではなくして、變動極まりなきものである。國民經濟を構成する所の總べての經濟單位は常に此の價格の變動によりて左右せられる。消費經濟に於ても價格の變動は常に之に或は利益或は損失を齎らすものである。一家計が一定の價格を以て若干量の財を購ひたる後、其の價格が騰貴するに至るときは豫め多く之を購ひ置きたるによりて利せりとせられ、反對に其の價格が下

落するときは其の豫め多く購ひ置けることによりて損せりと考へられる。

而して營利經濟は此の價格變動の間に何等かの利益を獲得せんことを期すものである。總ての企業者が得る所の利潤も、被る處の損失も、共に市場に於ける價格の變動より生み出ださるゝものである。さうして此の價格の變動に因つて生すべき損益の危險を冒すことを名づけて投機といふ。價格の生活である所の現在の經濟生活に於ては、總べての經濟單位は其の營利を目的とするを否とを問はず、常に此の投機的危險を冒しつゝあるものである。此の意味に於て現在の經濟生活はまた投機的。生。活。であるといふことが出来る。但し消費的經濟に於ては出来る限り投機的危險を避け、所謂生活の安定を保つことを理想とする。之に反し、營利經濟に於ては寧ろ投機的危險を冒すことによりて多くの利潤を獲得せんことを期し、時には人爲の手段を以て物價の關係に動搖を惹き起さしめ、其の間に營利の機會を作らんとするに至るものである。一切の企業は投機的利益を求むるものである。一切の商業は價格の差異に乗じて利益を捉へんとするものである。即ち總ての商人は廣き意味に於て投機業者である。併しながら普通の商業は所謂貨物商業であつて、直接に商品を動かすことに依り投機的利益を營まんと

するものである。之に對して取引所に於ける投機業者も一定の價格を成立せしめ、之に依て結局商品を移動せしむることになるのであるが、其の目的とする所は唯價格の變動そのものに依て利益を得んとすることに在る。彼等は其の締結する所の賣買契約の極めて小なる止むを得ざる部分に就いてのみ現物の受け渡しをなすものであつて、其の主とする所は差金取引を行ふに在る。即ち彼等は、商品を買入するものといふよりは寧ろ價格そのものの——相場——を取扱ふものであるといふことが出来る。此の意味に於て「相場師」といふ通俗なる用語は最も能く其の真相を云ひ現はすものである。貨物商業(Warenhandel)に對して取引所商業は(Preishandlung)である。これが投機者中の投機者であつて、即ち狹義に於ける投機業者である。此の如くにして現在の經濟生活に於ては總ての經濟單位は價格變動の波に漂はされ、投機によりて支配せらるるものである。

されば現在の經濟生活に於ける秩序は決して靜止的のものではない。否、絶えざる運動の中におのづから保たるる調整である。靜なること池の水の如きものではなくして、怒濤萬丈の間におのづから一定の平準の保たるゝ大洋の水の如きものである。即ち現在の經濟生活に於ては平靜の狀態は絶えず破れ、破れては復

た平靜に歸す一高一低繰り返されたる韻律の生活である。好景氣の極は恐慌となり、緩和せられて不景氣の時期の暫く繼續する間に景氣は次第に回復し、經濟界は再び活躍を始める。而して此の變動の波は現在の經濟生活が價格生活從つて投機の生活なるが故に起るものである。

以上の研究によりて經濟生活は所有生活であり、現在の所有生活は貨幣價值の生活であつて、貨幣價值の生活は、やがて價格の生活であり從つて投機の生活であるといふことが明かにせられたと思ふ。今此の價格生活の組織は如何、其の内に起る現象、之を支配する原則並に其の間に維持せらるる秩序は如何。―此等は理論經濟學の主要題目である。